

日の出から日没までの間も運行を実施する。例外；大災害発生時には夜間運航も実施することとしている。

4. 緊急運航の基準

ヘリコプターを適切かつ効率的に運航するために、新潟県消防防災ヘリコプター緊急運航要綱を定め、その運航基準は次のとおりである。

(救急活動)

1) 離島、山間地等の交通遠隔地から緊急に傷病者の搬送を行う必要がある場合で、救急車で搬送するよりも著しく有効であると認められ、かつ、原則として医師が搭乗できる場合。

2) 離島、山間地等の交通遠隔地において、緊急医療を行うために、医師、器材等を搬送する必要があると認められる場合。

3) 高度医療機関での処置が必要であり、緊急に転院搬送を行う場合で、医師がその必要性を認め、かつ医師が搭乗できる場合。

4) その他、特に消防防災ヘリコプターによる救急活動が有効と認められる場合。

5. 緊急運航の要請

緊急運航の要請は、災害が発生した市町村の長および消防事務に関する一部事務組合の消防長が運航管理者に行うものとする。

6. ヘリコプターの活動状況

ヘリコプターの年間飛行時間は、おおむね 300 時間を目安とし、計画的な運航を図っている。

7. 今後の課題

1) 救急業務の法的整備

- ・消防法施行令第44条

2) 消防・防災ヘリコプターの基本仕様

- ・救急専用ヘリコプターが望ましい。

3) 飛行場外臨時離発着場の整備

- ・医師を搭乗させる場所
- ・傷病者を搭乗させる場所
- ・搬送先病院の近隣において傷病者を地上におろす場所

4) 入院中に発症した肺塞栓症の 2 例

田代 友之・大西 康史
宮本 英樹・平川 隆一 (ゆきぐに大和総合)
萱場 一則・中村 達 (病院内科)

入院中に発症した肺塞栓症の 2 例を中小病院に於ける診断と治療に関する考察を加え報告した。症例 1, 78 歳

女性。右肩甲骨骨折にて入院中、初めてポータブルトイレを使用した際、発汗、チアノーゼが出現。心電図にて右脚ブロック、心エコーで右室拡大を認め、肺塞栓症による右心負荷と思われた。症例 2, 69 歳女性。子宮全摘術後初めてトイレまで歩行した時、呼吸困難とチアノーゼが出現。心電図にて右脚ブロック、心エコーで右室拡大を認め、肺塞栓症による急性右心負荷と判断した。急性期での診断には発症経過と簡便で非侵襲的な心電図、心エコーが有用であると考えられた。臨床経過、検査所見より肺塞栓症が疑われる場合には確定診断に至る前に早急に治療を開始すべきであると考えられた。

5) 重篤な出血性ショックに合併した hemodynamic stroke の 3 例

田中 敏春・本多 忠幸 (新潟市民病院)
広瀬 保夫・本多 拓 (救命救急センター)

症例 1 は自殺企図による左手首切創。左橈骨動脈完全断裂しており出血性ショックの状態であった。症状軽快後視力障害あり頭部 CT で両側後頭葉に脳梗塞出現。

症例 2 は 300 kg の鉄製のドアの下敷きとなり両側血気胸等で入院、著明な出血性ショック状態であった。症状軽快後左半身麻痺あり頭部 CT で右大脳境界領域に脳梗塞出現。症例 3 は交通事故による外傷性血気胸、出血性ショックで入院。症状軽快後右半身麻痺、右半側空間無視あり頭部 CT で左大脳頭頂葉から後頭葉境界領域に脳梗塞出現。3 症例いずれも重篤な出血性ショックでありショックに伴う脳灌流圧低下が発症の原因と考えられた。hemodynamic stroke はほとんどが基礎に内頸動脈狭窄病変を有するのが特徴だが 3 症例に施行した MR アンギオではいずれも脳血管には狭窄病変を認めなかった。

6) 発症後早期の手術および血液浄化療法が有効であった小児重症肺炎の 1 例

大滝 雅博・飯沼 泰史
八木 実・内藤万砂文
松田由紀夫・内山 昌則
岩渕 眞 (新潟大学小児外科)
丸山 弘樹・藤巻 亮子 (同 第二内科)

重症急性肺炎は、厚生省特定難治性肺炎患に指定されており死亡率が高く、近年 SIRS の概念が本症にも取り入れられ、その治療法は大きな変化を遂げている疾患